自己催眠状態において殺人未遂事件を惹起した一症例の研究

丸　井　文　男

Ⅰ　まえがき

本症例は，昭和45年夏，某県において殺人未遂事件を起こした17才の一少年T君の例である。同君は家庭裁判所を経て，某病院で約2ケ月の精神鑑定を受けた。その結果処分保留となりその後再鑑定，治療を筆者が委託され，約1年7ケ月に亘って入院，治療的面接を継続，Tは昭和47年6月，治療の成果にもとづいて退院し，裁判官より不処分の審判を受け，同年8月，高校2年中退のため，大学入試受験資格検定試験を受験，合格。

昭和48年4月，某私立大学に入学，現在，全く健全な学生生活を送っている。

この症例を採りあげた事由は，治療継続過程で明確になったTの自己催眠現象が，本事件と関連している稀有の例であるためであり，その人格の発達の過程も可成り明確に把握し得たと思われたからである。よって，その概要を記述し，若干の考察を加えることにした。

Ⅱ　事件の概要

昭和45年8月○日，午後11時30分ごろ，自宅炊事場から，約18cmの庖丁を持ち，外出，午前1時40分頃，O市の某派出所を訪れ，町名をたづね，地図で説明をうけたが，説明者が背後をむいたすきに，庖丁で某巡査の背部を滅多突きし，背部刺創，肺穿孔，皮下気腫等全治2ケ月の重傷を負わせた。更に，隣室に居合わせた某巡査の頬部及び頚部切創等全治7日間の傷害を負わせた。その際，前者の巡査がけん銃を発射し，Tの右手首に命中，銃創をうけ，（全治10日間程度）その場でたい捕された（家裁調書より）。

公式の事件名

殺人未遂，銃砲刀剣所持等取締法違反

Ⅲ　精神鑑定とその問題点

昭和45年8月より10月まで，約2ケ月間某精神病院において，精神鑑定を受けた。鑑定事項は，1)，現在の精神状態，2)，犯行当時の精神状態の2点である。各種の心理検査，脳波検査などのほか，詳細な問診が行なわれ，その結果の鑑定主文は，

1)　現在の精神状態には，障害が内在している。即ち，所謂挿間性朦朧状態に似たてんかん性精神代理症（精神発作型）であり，現在はその周期の間歇期にあるものである，因って現在は，是非善悪の弁別能力には障害を認めない。

2)　犯行時の精神状態には障害（意識障害――朦朧状態）があった，犯行時は，てんかん精神発作期であり，意識濁濁があったので是非善悪の弁別能力には高度の障害があり，責任能力は喪失していた。以上である。

この鑑定の結果の根拠になっているものは脳波検査の所見である。

それはメジマイドけいれん誘発試験によって，非定型的な低サイクルの汎発性棘徐波が出現したという所見にもとづいたものである。

この精神鑑定結果に対する疑義

本精神鑑定は，2ケ月間の短期間に実施されたものである。主文及び鑑定書の内容は詳述且つ多量のものである。が，しかし，Tの本事件前後の行動と，鑑定結果の主文で指摘されているてんかん性精神代理症による意識の障害にもとづくものとの所見とは，合致し得ないと思惟されたので，当病院における治療的方法の基本方針は，全く別個立場からTの行動の再検討を含めて，再鑑定の態度と治療的関係をもつことの方針をとった。

なお再入院後，二回に亘り脳波検査を行なったが，特記すべき異常所見はみとめられなかった。また，Tの行動の記録からみても，この鑑定結果に賛意を表し得ない。

Ⅳ　家族構成

この家族は，両親ともO県出身で現在でもO県に父方の祖父母が居住している。父親の職業は会社員で転勤が多く，T君も小学校時代より，高校生までの間に5回転校している。

家族構成は，図1に示すように，両親と兄1名及び本人の4名家族で兄は，高校時代から親と別居し，下宿生活のため，T君は，中学2年より両親と3人の生活をつづけてきていた。

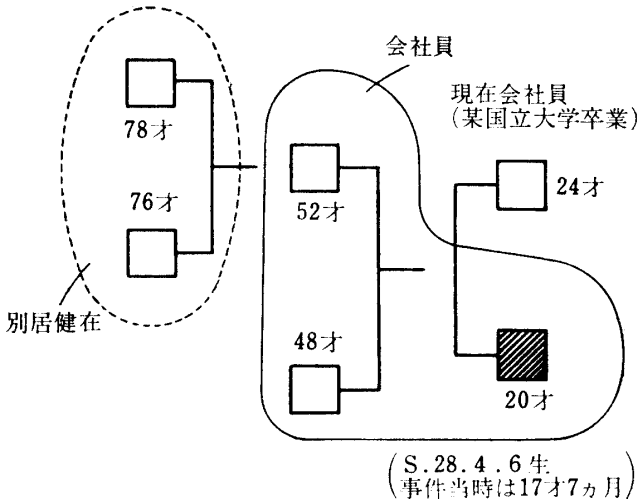

図1　Tの家族構成

父親について

3人同胞の2男として出生，旧某高専卒業，軍隊生活を経て，戦後，現会社に復帰，昭和24年，現在の妻と結婚，会社の勤務のため，平均3年程で転居が多かったが，現在はO市附近に居住地を定めた。

性格は，一見，仕事にも意欲的，精力的であり身体的にも頑健にみえるが，一面可成り細かい面をもち，対人的なつめたさと孤独癖ともいえる側面を潜めている。音楽鑑賞，カメラ，草花栽培の趣味をもち，社会的つきあいが少なく，飲酒は殆んどしない。又，寝つきのわるい傾向がある。面接時の態度も，職業にふさわしい印象であるが，Tについても自発的に質問したり，今後のことについて，つよく心配している様子はあまりうかがうことはできにくい。

父親のTATの所見

昭和46年8月28日実施（検査者　J）

1)　熱心に，テストに応じたが，内容は特に豊かでなく，叙述の量は少く平凡である。固執反復傾向があり，3つのカードに連続して「自首」という内容が出ている。

全般的に自己を投影しているというよりも，絵の叙述的態度が優位である。

2)　達成の欲求がやや弱く，対人関係には，あまり豊かな感情が表出されておらない。

ロールシャッハテストの所見

昭和46年8月28日実施（検査者　S）

創造性が貧弱，知的水準は平均知であるが，人間反応，運動反応が極めて少く，共感性能力が弱いことを示し，潜在的には対人的に感情の交流が乏しいことが推測される。

母親について

3人同胞のなかの娘1人で，幼少時，病弱であったが，旧制高女卒，実母死亡後結婚まで母がわりの家事をして青年期を過ごした。

性格はもの静かで，冷たいかんじのする程の落着きがあり，今度の事件については，意外なほど冷静さで対応する態度が印象的である。育児，養育についての態度は，自主性をつけるような考え方の反面，冷たく，乳離れを早くしたり，なるべく抱かないようにという方針であったという。対人的には消極的で，共感的なかかわりをもとうとしない傾向がみられる。

一方，子弟の教育には，極めて熱心で父兄懇談会には，必ず出席し一流の国立大学進学を子供に期待していたという。

母親のTATの所見

昭和46年8月20日実施（検査者　J）

1)　初発時間は，10秒以内で速く，絵の説明に終始し，単純な内容である。主人公への同一視も乏しい。

2)　従って内的感情が殆んど表出されておらず，刺戦面からの感情反応は殆んどなく，対人関係でも感情的結合も極めてうすい。

3)　最も特徴的は，客観的，理性的で且つ共感性が欠如していることである。

ロールシャッハテストの所見

昭和46年8月24日実施（検査者　S）

1)　反応数は平均的であるが，P反応が異常に多く，帯同的思考様式がうかがわれる。

2)　色彩反応が全く欠除しており，外的刺戦に動かされないタイプで日常生活が理性的，平坦的であろう。

3)　対人関係では，帯同的であって，日常的には，他者と表面的には，適度に適応を示しているが，しかし暖かい情動的ふれあいはない。

兄について

Tの4才年長にあたる。高校時代より下宿生活で，本事件当時，国立某大学3年在学中であった。小学校当時から，順調なコースを進み，両親からみると，ほぼ期待通りに成長したといえる。

家庭のなかでも，Tとはタイプがことなり，比較的よく家族と接触し，友人も多くマージャンを趣味としており，乗用車をもっているなど，真面目な勉強家の反面，現代の学生一般の平均的な生活態度をおくってきている。

性格的にも，慎重且つ真面目，堅実，合理的な人間とみることが出来る。

以上簡単な記述であるが，兄は人格の発達過程において，特に偏位した傾向はないと考えられる。

兄のTATの所見

昭和46年8月24日実施（検査者　J）

全般的に防衛的態度がつよく，物語の量も豊富とはいえない。絵優位で叙述的傾向がみられるが，内容の分析からは特に特徴的な反応はなく，適切な達成欲求，自律欲求もあり，ほぼ年令とふさわしい成熟したパーソナリティといえよう。

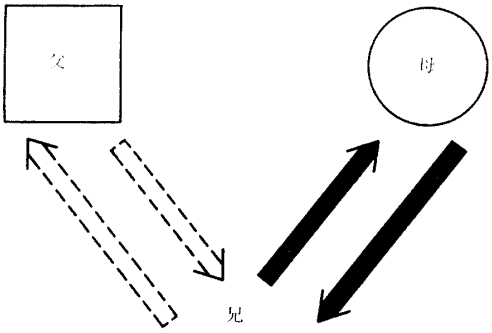

図2　兄の認知している家族関係

しかし対人関係においては，やや自己中心的であり，他者との暖かい情感の交流が少い傾向がうかがわれる。

家族関係については，兄は図2のような親子関係と把握しているといえよう。結局，兄の場合も（Tと同様―後述）父親との間，一定の距離感をもっている。

ロールシャッハテストの所見

昭和46年8月24日実施（検査者　S）

1）知的水準とひろさをうかがわせる内容の範囲のひろがりがある。

2）やや強迫的思考をもちやすい傾向がみられ，情動的には，不安及び敵意感情など不安定の傾向がみられる。

3）上記の強迫的傾向は，対人関係においても，緊張をもちやすく，防衛的態度をもちやすいことが考えられる。

V　Tの生活史

（1）　生育歴の概要

(1)　乳幼児期

年　月 （年　令）	生育歴及び行動の概要	家庭及び環境の概要
昭和28. 4. 6出生	某市にて出生（第2子） 母親，妊娠時，出産周辺期を通じて特記すべき異常はなく， 妊娠10ケ月，安産（体重　3500g）	両親と兄，叔父及び祖父母同居。
乳児期より	1.　母乳は1才未満でやめたが，お腹がすいた時以外は，殆んど泣くことがなかった。	両親の教育態度は放任的で，ひとり遊びをかへってよしとして放っておいた。しかし用便，手洗などについて基本的なことはかなりきつくしつけを行なったという。
	2.　抱くことをつとめてしないようにしつけを考えた。 このためか，その後はハダにふれることをTが嫌う傾向が出た。	祖父母は，あまり育児に手を出さなかった。
	3.　ひとり遊びが好きで，乳母車のなかでは，1時間，2時間でもだまって空をながめていた。	経済的には裕福で，物質的には，かなりわがまま放題であった。
	4.　笑うことも少く，指しゃぶりはなかった。	
4才（S. 33年） 市立幼稚園入園	1.　最初の半年間は，幼稚園へ行くのをいやがり，母親がつきそっていた。	このころは，父親は往復3時間の通勤を自宅からつづけていた。
	2.　友達も特定のもののみで，明るくはねまわるようなことはなかった。	
	3.　兄が小学3年ごろになっていたので，いつのまにか本をよむことを覚え，かなりのものを好んでよむようになった。	

(2) 小学校時代

年令 年月	行動の特徴	家庭及び環境の概要
小学校入学 （S．35）	1. 健康は特に問題はない。 2. 学業成績は抜群，学級委員。 3. 真面目すぎ，頑固，妥協性に乏しく，授業中に他児がさわぐと廊下へたたせたりした。校則，規律にきびしすぎるくらいきびしかった。 4. 職員室や校長室へよく出かけていっていろいろな話をすることをこのんでした。 5. 従って級友の親しい仲間は，乏しい方であった。	祖母がTの足を踏んだことがあったが，それ以来祖母によりつかなくなった。父母は，殆んど干渉しなく，ただ勉強のことは，口やかましかった。 S.37.兄中学へ進学 兄がS・F小説をよむことによって影響をうけ，Tもかなりよみあさるようになる。 又紙細工の兵隊やタンクをつくって，ひとりで敵味方をつくっての遊びをこのむ。
小4　転校	小4—小6の学校成績及び行動評価の概要，学業成績は常に1～2番で，勉強をしなくてもよく出来た。 行動の記録としては，係の仕事は真面目，読書欲旺盛，一つのことに熱中する傾向があり，戸外での遊びを好まない。 小学6年生のころがTにとっては，最も充実した生活だったらしい。友人も比較的出来，勉強をした。メガネをかけはじめる。	 S.40.兄，某大学附属高校入学（下宿生活）
(3) 中学校時代		
中学校入学 （S．41.）	1. 学業成績は，全学年中トップクラスに一貫して入っていたが，体育は，実技が苦手でぎこちない。 2. 生徒会役員やクラス委員をよろこんでひきうけ，役目も充分果たしていた。 3. 出席状況は極めて良好で，3年間で欠席は1日のみ。 4. クラブ活動は，1年，登山，テニス。しかし，あまり身を入れず，2年以後合唱部でフルートをやり，一応熱心に参加した。 5. 友人は特定化の傾向があり，多くの級友からはきらわれる面があった。 例えば1年の学年末クラスの寄せ書にTのわる口が沢山かかれていた。 6. 几帳面で妥協性に乏しい，徹底的に何事もやる傾向があり，囲囲とかけはなれた存在であるのは小学校時代からひきつづいていた。 7. クラブ以外では一人で行動することが多く，休み時間でも文学全集などをよんでいることが多かった。	父　転勤，従って中学校は転入の形で入学。 中1. 自慰行為を自然に覚え，次第に習慣化しはじめる。しかし，過度にはなっていない。 両親の話によれば，他人の飲んだ湯呑はきたないといって，毎日学校へ水筒をもっていった。（高校でもつづく） 中2のころから読心術などに興味をもつようになる。（詳細は後述） このころから，夜10～11時ごろ必ずといってよい程散歩に外出するようになった。 中2の3月 兄　某国立大学入学（下宿）
(4) 高等学校時代		
（S．44.） 県立某高校へ入学（地域内で最優秀校といわれている）	1. 1年次の成績　中の上。 2. クラブは物理クラブ。しかし，殆んど出席しなかった。 友人関係は殆んど出来ず，中学校時代の特定の友人2～3名とのみ（男，女）交流。 3. SF的な作話を真剣にはなすようになる	 S．F小説を書き出す。

	4. S．44年7月，友人某君にカンニングの方法とか完全犯罪法についてはなす。 5. 8月下旬，置手紙（遺書）を残して家出，（詳細は後述）3日後，○○山で救出。身体疲労のため約1週間入院。（肝臓治療）高校は1ケ月休む。 6. 9月中旬名大教育学部で受診（ロールシャッハテスト実施） 7. 睡眠学習法を実施「勉強が好きだ」というような自己暗示をかけるように。 8. 中学時代の親友（男）と恋愛について頻繁にはなしあう。	1年の第1回の中間考査の成績が思ったよりわるくショックをうけ，頭がわるい，駄目な人間だといい出す。 母親は，成績がわるいことで非常に口やかましくいう。 夏休み，勉強にあまり手がつかなかった。 父親は，睡眠学習法の本などを買うことに協力。
高校2年4月	（他県の県立高校へ転校） 1. 学業成績，1学期中の上。 2. クラスにとけこもうとせず，孤立的で，大人びた態度，几帳面でくだけたところがなく，友人は少ない。 3. 中学時代との友人との交流がつづく。 4. 散歩は相変らずつづくが夜は7～8時ごろで，早い時間にねる。 徹夜で紙細工ををやったりすることがあった。 5. コーラス部に所属，しかしほとんど，出席しない。 6. 8月下旬事件発生。	父　転勤。 S．45年8月の事件以来，両親はTの行動に気をくばるが口出しはしないように態度をかえた。 夏休みは無気力気味で，自殺を考えたことがあるらしい。 8月中旬，3日間，家族4名で関西旅行。
	高校　中途退学となる。 知能指数 125.（新田中B式） 144.（WAIS）	

2. Tの現在の身体的特徴

現在（入院当時）は，身体約 170*cm*，体重約56*kg*のやや細長型，色白面，一見，ひよわなかんじがする。しかし，特に，虚弱ということはない。

態度，姿勢は，対人態度は，丁寧できちんとし，一見，外観は貴公子的といわれるタイプ，歩行は，やや内股あるきで女性的。走ることなど，運動能力は同年令のなかでは劣っている方である。

なお，近視（左右とも 0.1）で小学校6年生より眼鏡を用いている。

Ⅵ　Tのパーソナリティの発達と治療仮説

以下は，T自身及び両親，兄についての面接資料及びTをはじめ家族全員の臨床心理検査（TAT，ロールシャッハテスト）の結果をもとに，筆者の考えているパーソナリティの発達過程の理論にもとづいてまとめたものである。

なお，この症例研究は既に述べたように，さきの精神鑑定が，脳波異常の所見をもとに，てんかん性精神代理症とし，事件は，その発作状態における行動の結果と判定していることに疑義をもち，脳波検査，2回に亘る結果と，鑑定書の内容，及びTとの最初の時期における面接によって本事件は，Tのパーソナリティに大きなかかわりをもつ自己催眠状態というべき現象下のものと推論し，その後の治療の仮説を立てる上にまとめたものである。

筆者が考えている臨床的なパーソナリティ理解の方式は，次の式に示されるものである。

$$P = f\ (T \cdot E \cdot S.C \cdot S.V)$$

P……パーソナリティ　T……気質的側面
E……自我
S．C……自己概念
S．V……社会的価値

若干の説明を加えると，個人の現実の行動のなかにあらわされるPは，これらの4つの関数によるものであって，臨床的にパーソナリティを理解し，或は治療的かかわりをもつ際には，S・Cを中心に接近することにな

る。

しかし，その治療的な仮説をひき出す手がかりは，単なるS・Cにおわらずに，S・Cの状況をもたらす発達的過程を理解する必要がある。

以下，Tについてそれぞれの側面について述べることにする。

1. T——気質（Temperament）

パーソナリティの根底をなすものとして，考えられる気質的な側面は，親からの体質の遺伝と同様に，伝承性をもつものと考える。この気質的側面の因子が常に，個人のパーソナリティの臨床的理解に多くの意味をもつとは云えない。それは，両親などからの影響と明確さ，顕著さと，臨床的意味との関連によるものである。

Tの場合は，父親からの影響を比較的多く受けているとみることが妥当と思われるに至った。

Tは，乳幼児期から，泣くこと笑うことの少ない，手のかからない子であるとともに，今日まで，一貫していることは，対人関係においても，真に自己を開放することがなく，孤立，自己閉鎖的で，一面空想的習癖を幼児期から身につけている。今回の治療的面接の過程において，父親との間の数度の面接のなかでも，父親は，Tが自分に相似している点を見出している。

父親の言によれば，この傾向は，基本的には，父親自身の幼少時と極めて類似しているという。体型的にも，兄は，母親にかなり相似しているが，Tは，父親に，より相似性をもつことを可成り明確に指摘することが出来る。

2. E——自我（Ego）

自我の発達は，パーソナリティの発達の中核をなすものである。

この自我の発達は，気質的な素因の上に，乳幼児期からの育児及び，養育環境などの対人関係のなかで行なわれ，青年期までに，その大半が形成されるが，Tの場合についてまとめてみると，Tの自我は，その統合（Integration）は，ある程度安定しているが，それは自己中心的孤独的な一方，自己防衛的であることによって，児童期までの間は，大きな破綻をみせることなく過ごし得たものとみることが出来る。

即ち，Tの自我は乳幼児期から，手のかからない子であることによって，母親が述懐しているように，自律心を育てるようになるべく抱くことも少くした育て方をうけてきており，幼少のころから可成りひとり遊びを好むようになっている。

従って，母親との間に，多くの普通児が母親からうけるような基本的な母性愛情を適切に享受して成長しているかという点については，むしろ，愛情欲求不満の体験を可成り持続的にもちつづけてきたように考えられる。これは，小学校の低学年ごろまでの社会性へ発達をみても，知的にすぐれた潜在能力をもちながら，幼稚園に入園したときも，約半年間，毎日，母親が同伴しないと通園出来なかったなどにみられ，幼児期までにおいて，既に，発達的なひずみをあきらかにしているように思われる。

小学校低学年では，クラスの仲間との交友に関心をもたず，孤立的であるとともに，職員室や校長室へいって，教師と話し込むことを好んでしたという。また，T自身のことばをかりれば，空想癖の傾向は，このころまでに，ひまであれば，四六時中だったということである。一方，小学校時代でめだつことは，校内の校則などを守ることについて級友に対して，教師以上，きびしい態度をおしつけていたという。

このようなTの存在は，自我の内部では，一応，安定した形であって破綻はないけれど，行動力レベルでは次第に，自己顕示的欲求のあらわれともいうべき態度が目立つようになり，潜在的レベル（covert level）では，きづつけられやすく，対人的適応も充分発達していなく，自己防衛的で，現実逃避的になりやすい自我をつくり上げていったとみることが出来る。

このような児童期前期の自我は，兄の影響をうけ，読書や，ひとり遊び（紙細工を自作する戦争ごっこあそび）によって助長され，学校での成績抜群であり，一応クラスではリーダー的な立場を保ちつつも，それらの行動上や，表面的な環境のよさにもかかわらず，内面的な自我の発達は，未熟のままで，次第にその欠陥を明らかにしてきていたように考えられる。

中学校に入学してからも，S．F小説への関心は一層つよまりTの興味は，読書や，白昼夢的な生活の方向に集中する傾向が助長され，日常の学校における学習に対する興味，意欲は依然として，積極さがみられず，現実逃避傾向がつよまる方向にあったといえる。

本来，自我は，殆んどが無意識な体験として発達し，成長後もその多くは直接的には，認知することは出来にくいものであるが，弱い，きづつけられやすい自我を防衛し，現実環境に一応破綻なきを示し得たものは，自己概念が明確になりはじめたこの中学校の年代までである。

3. S.C——自己概念（Self Concept）

自我が殆んど意識されないで発達し，パーソナリティの中核を形成するのに対して自己概念は，意識された自己，認知された自己であり，青年期になって急速に明確化され現実行動に反映してくるのである。丁度，中学校

に入学したのち，間もなくのころから，自己概念が認知されるのが通常であるが，Tは，たまたま中学2年のころに，今回の事件をひきおこすにいたった自己催眠状態の最初の体験をしている。

当時，S．F小説の影響によって小説を書くことを試みたりし，また，夜などよく散歩に出かけて，ひとり瞑想に耽ったり空想的世界にさまようことを日課としていたようである。

兄は，他の一般の子供達と同じように，中学時代の前半でS．F小説の興味は失ってしまっている。しかし，TはS．F小説への耽溺は，自らの創作化や，白昼夢的現象の深化となって中学校後半から高校時代へひきつがれている。このあたりがTの特徴とみることが出来よう。

日常生活のなかでは，「空想的世界における自己」と「現実の生活における自己」とのズレ（discrepancy）の認知が次第に拡大しつつあるようになったが，このころのことをT自身は，のちになって，勉強がきらいな自分について，何度もスケジュールを立てては，打ち破ろうとしたり，白昼夢に逃避する自分を，取り除けようと試みたりしてたといっているが，いづれも自己の変革にはつながっていない。

中学校の学年がすすむにつれて，Tにとっては，親の期待にそうような進学，受験というものが大きな位置を占めるようになった。しかし，中学校から高校へは殆んど勉強はしなくても，地域の一流の進学校の進学出来る学力をたくわえることが出来たといえる。

高校に入って，1学期の中間考査以後，Tの内面の混乱，自己概念のズレによる現実生活の不全感は増大する。そして，1学期来の成績は，中位となり，大きなショックを受けた。

この夏休の後半，行方不明事件をひきおこすことになる。

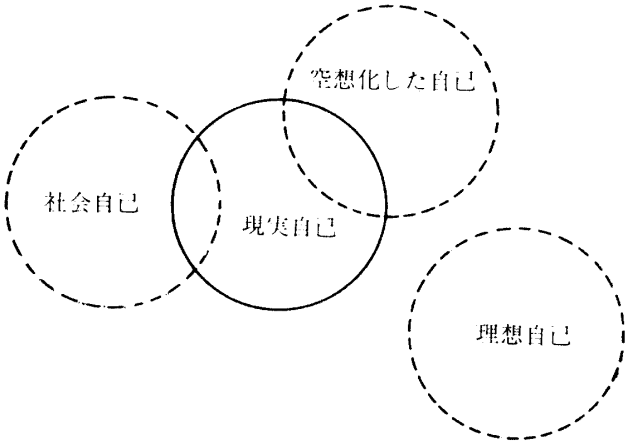

図3　Tの高1，高2時代の自己概念の模型図

当時のTの自己概念を模型化すれば，図3のようにあらわすことが出来る。

この年代の一般青年がもつパターンは，図4のようだとすれば，Tはそのパターンにおいていちじるしい相異を示していたと考えられ，現実自己の例には，たえず空想化された自己が“ぼうれい”のようにつきまとい，理想自己は，現実自己と全くかけはなれて，自己概念のなかに位置づけられていない様相となっていたのではあるまいか。

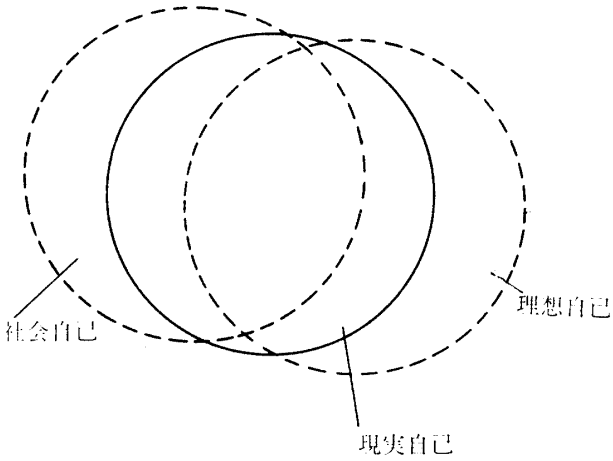

図4　一般青年の高1，高2時代の自己概念の模型図。

4. S.V.——社会的価値観（Social Value）

個人のパーソナリティの発達を臨床的に把握し，理解する上に，もう一つの重要な因子は，社会的価値観である。

Tを理解する際に，彼の社会的価値観の形成に大きな影響を与えたものは母親の存在であろう。

母親は，兄や，Tの幼少時から，子供に対する期待もつよく，それは，現在の父親の生活以上のものを子供達に期待するという一貫した考えであった。

Tについて学校の教師から資料をみると，小学校時代から，中学校で何度か転校をしているが，いづれも共通していることは，母親の教育への関心のつよさである。それは父兄の懇談会での完全な出席にあらわされている。

そして，兄は，これらの期待に答えられるように，順調に成長し，某国立大学へ進学在学しているが，Tは小学校時代から中学校時代までは，殆んど問題は表面的にあらわれなかったが，高等学校に入って一気に，この期待とのずれが明確化されることになる。

Tは，幼少時からの生育歴のなかで，家庭のなかで獲得したものは，地位，名声，お金という社会的価値観であり，現実にもある程度みたされていたにも拘らず，（経済的に恵まれていた）空想や白昼夢などでは，その主

人公は自分であり，それは王様，女王，或は，戦いに強い権力者，みんなから尊敬されている人物などに同一化されたものであった。

兄との学校における成績をT自身が比較してくれたところでは

小学校……T＞兄
中学校……T≒兄
高　校……T＜兄

即ち，幼少時はTの方がよかったが，長ずるにつれて，逆転してしまったということで，この母親を中心として，家庭における価値観は，Tの高校入学後に決定的な影響を与えたことになる。

即ち，Tにとっては親の一流国立大学へという期待にそい得ない，勉強ぎらいな意志の弱い自分を現実的世界のなかに位置づけることが不可能となって，破局的行動につらなっていったとみることが出来る。

以上のようにパーソナリティについての理解をすすめてきた結果は，本事件の背景にTのパーソナリティの未成熟性があり，青年期に入るにつれて自己概念のなかの不一致性が増大し，現実世界における社会的価値観との間に，破局化がなされたとみることが出来る。

そこで治療的面接のなかで，仮説的には次の諸点を明確化し，自己概念をとうして，Tのパーナリティの現実認知と，現実生活体験を強化することをあわせていくことを考えた。

1）T自身の自己の内面を洞察する力をますこと。現実自己の認知を深めること。

2）T自身に現実的生活意欲を増大させること。

3）事件の心理的背景を明らかにすること。

Ⅶ　治療経過

1.　面接の経過

昭和45年11月19日，某病院へ家裁より診断の明確化のための目的と，治療を依頼され入院した以後，昭和47年6月9日退院するまでの約1年7ケ月の間における治療的カウンセリング合計56回の経過（ほかに，家族面接10回がある）の概要をTの内的変化がみられた時期に分けてのべることにする。なお，筆者がこの面接のすべてを担当したが，1ケ月3～4回程度の面接であった。

1）当初の治療の方針

実は，本事件の前年の8月に，Tは夜間にこっそり家出し，三日間行方不明になった直後高校側からのすすめにより，われわれの研究室を来訪，受診を希望したことがあった。その時は，筆者は，大学内業務多忙のため面接出来ず，助手のK君がロールシャッハテストを実施し，若干の問診を行なったのみで，特に現在は異常な所見はみられないということであった。

しかし別掲（図4）のような遺書をのこして，山へ行方不明になっており，その内容は理解困難な非現実的世界のことがかかれてあって，非定型精神病の一種ではないかとの疑義をもった。

しかし，その他全く特記すべき異常行動も認められず，学校通学を継続していたわけである。

ぼくのことについて簡単に延べておきます。なぜならば、ぼくは、ゆうかいされたのでも、家出したものでも、自殺したわけでもないのですから。恐らく今日あたりもこの部屋の中をさまよっているにちがいありません。

ぼくは向いの墓地で「ゆうれい」――又は「ぼう霊」なるものを物理的研究をしてきました。中学二年の時に始め、それ以来起きている時間の半分以上を費して研究した結果、簡単な方法で実体を消滅させ、又再現することができるとわかったのです。

（中　略）

ぼくは三日たって復元できなければ、当分はもとにもどれないだらうと考えています。その間にせっせと知識をつめこみ、復元する。

なお、この手紙はよけいな心配をあなた方にかけまいとからの配慮ですが、数年間は空中をただよっている可能性が大なので、学校には心臓まひで死亡したと伝えて下さい。警察には行方知れず、家出とでも届けて下さい。

ではお元気で、もどった際には、○○へでも連絡します。（この家に数年あなた方がとどまるとは考えられませんから）

図5　Tが昭和45年夏3日間，山へ行方不明になったときの遺書

原　　著

銀色の丘

（1）

冷たい二月の風が、北の空高く、消え去り、暖かい三月の風が南の国から、花々の香を運んで来る――広大な七つの丘陸（ヒル）と七つの平原（ランド）に広がる〈大亜合王国（ユナイタルトサンクラム）〉は今、春のおとずれをむかえようとしている。しかし、王国内はまだ冷たい――死のように冷たい風が吹き荒れていた。黄死病の恐ろしい風が、王国内を舞いくるっていたのである。すでに国民の三％が土の下にほうむられ一割が病の床にあった。その中に、〈連合王国〉の〈現代の王〉クレイトランドのブラデント王――かの偉大な王が含まれているのだった。

（2）

「ロイヤル！どこへ行ったのだ。あいつめは！」グレイトランドの北〈亜合王国〉の北端にあるシルバーヒル（銀色の丘）の領主フラウムは大声でどなった。彼もまた、病の床にあったが病気は軽いものだった。――つまり、黄死病にあっては、声が出せるということは、ずいぶんと軽い病状といえるのだ。

「は、……森の……あたりと……思われますが……」領主フラウムの息子ロイヤルの教師であるパルフはおどおど声で答える。

「思われる?!何たることだ、おまえは、ロイヤルの教師なんだぞ!!」

「お静かに!!!」領主フラウムのどなり声を低い年よりの声が押さえた。フラウムの主事医ガンコである。「あまり、どなられて、血圧を上げられますとお命にかかわりますぞ」

「その、命にかかわる状態のわしを放って、ロイヤルめはどっかへ行ってしまったのじゃ！今にもブラデント王の命は消え去ろうとしている。国の大事の時に、いったいあいつめはどこへ行ったのじゃ！」

広い領主の寝室のカーテンがゆらいで、「アーア……」よく寝たな」さっとカーテンの陰から、公子ロイヤルが現われた。

「パパ、そんなにどならなくてもいいよ。親の死に目に会わないほど，ぼくは親不幸じゃないから」

「死に目?」ぽかんとフラウム公はロイヤルを見つめた。見る見る、その顔がしゅにそまっていった。

「何だと?死にそうなのはブラデント王じゃ！　わしではないぞ！」

「へえ?じゃ心配することもないんだな」ロイヤルは大きくあくびした。

「心配することがあるんじゃ！」

「何?」少し驚いて、ロイヤルはたずねた。

「王権のことだ」

「王権?　何のこと?　王になる権利は王の息子がさずかるんでしょ?ああそうか！　ブラデント王には息子がなかったな」

図6　Tの小説の一部

このような経緯もあり，精神鑑定書の記載からみても，結論に疑義をいだいていたので，脳波検査の再実施とともに，てんかん性精神代理症以外の精神病理学的視点の上に立脚して前述のパーソナリティの発達における問題点について治療仮説を立てカウンセリングをすすめることにした。なお，入院当初より，病棟内の日常を観察する必要をみとめたので，特定の看護婦1名を指定し，さりげなく行動を観察し，記録することを依頼した。脳波検査の所見は，2回実施，いづれも特記すべき異常はなかった。

病棟内生活は，入院当初約1ケ月間は，個室（保護室），爾後，閉鎖棟，最後の約6ケ月間，開放病棟へ3回に亘って転室している。その都度，担当病棟医はことなったが，担当医の協力によって，日常的要求などを含めて，カウンセリング担当の筆者に殆んど委かされた状態をとった。筆者は，月に3～4回しか訪問せず面接も断続的であったが，治療完了後の今日振り省えってみると，この方法は，Tに対する治療的関係を保持するに好条件であったと考えている。

第1期　自己防衛・自己顕示期

（昭和45年11月～昭和46年3月）

入院した翌日，はじめて病室で会った。個室（保護室）へ入室していたが，この病院は新築して3年目であ

り，保護室といっても畳敷きの部屋で，多人数の部屋よりむしろ快適であるほどであったためか，Tは，「本をよんで，食べさせてもらっていれば，ここなら10年，20年，いてもよいです」というような言葉が自然に口からすべって出た。これは，裁判所における審判によっては，少年院送致も考えられているので，病院へ入院したことによる安堵感も含まれた心境が素直にあらわれたものと思われた。と同時に，高校生活から開放されたもともと勉強嫌いのTとしては，逃避的な現実の生活に対するある種の満足感もあったようである。

そして，病棟での殆んどすべての患者が参加する作業療法の作業も「単純だから」という素振りをし，一方，ノートに，「シルバーヒル（銀色の丘）」（図6）と題した仮空の外国（図7）（グレート国）の王位をめぐって争いがおき，正義の人と悪代官が登場，領主の息子と水車屋の娘の求愛も入る5つのあらすじをたてて，沢山の仮空の国名や軍隊が出てくる小説を書き出す。殆んど，中学時代のSF少説の筋書のなかからがそれをまねているようであった。

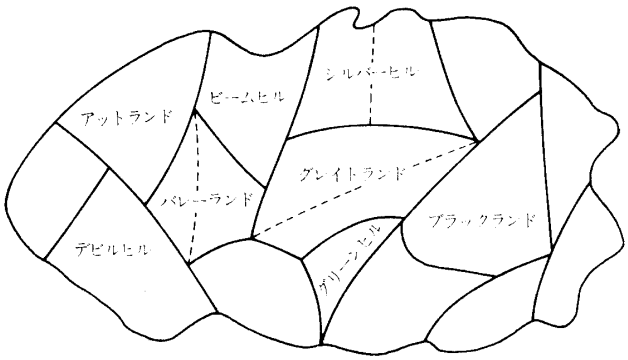

図7　小説に出てくる国名図

筆者は，当初から興味をもった風を示しながら，内容は，殆んど真面目にみようとしないでいると，本人の方から「あれをみたか，どんな風に思うか」というような催促的な質問が出た。あれは，いづれよむといって，このころは，幼少時のこと，小中学校時代，兄とのことなどのはなしを聞くことを中心にした。

昭和46年1月下旬には，小説の書くことが少くなり，あまり気が乗らない調子になる。2月上旬では，書く気もおきないし，何もする気がおきず，ディルームへも出ない，ベットでねてばかりいる，やることがないのでなど，調子がおちた状態がつづく。この頃，看護婦の観察記録では，一日中殆んどベッドにいてぼんやり考え込んでいる様子が目立つ。（このころは，日中でも，かるい自己催眠のトランス状態に入って，空想的世界に入りこんでいたとみられる――後述）

このころまでの数回の面接では，昭和44年8月の山へいった行方不明の事件，昭和45年8月の今回の事件のことに触れると，沈黙することが多く，ことに今回の事件については，顔の表情もかわることがはっきりわかるくらい変化をみせ，内容については，殆んどふれたがらない状態がつづいた。自分でも事件について，日常殆んど考えない，わざと避けているのかという質問には，「避けているのかも知れない，」しかし，「意識的にしているのではない，無意識的には，さけているかも知れない」という。

また，入院していることに退屈をかんじ出し，退院のはなしになる。退院すれば，勉強しなければならないでしょうね――自分は勉強は嫌いだ，ということが繰り返し，会話に出る，「将来の生活にも熱が入らないから困まる」などという。

3月に入って又調子が上むいたといい，“土曜日”という小説をかき出す。中学校のころのガールフレンド（片想い程度）が中心の第1部をかいた。（土曜日という題名は，筆者が当時よく土曜日に通院，面接をしていたからということが内容に出てくる）。

このころは，事件のことは，ふれたくない態度がますますはっきりしてくる，面接時に，そのことをたしかめるような問診などをすると明らかに嫌悪，防衛的な表情となり，沈黙する。病棟内の他の患者との間に自分のペースにあわないことがおこると，かるいトラブルとなる。

第2期　自己告白期

（昭和46年4月――昭和46年6月）

このころは，面接ごとに，時折事件のことにふれたり，筆者もTの内面的メカニズムがわかってきていたので，若干解釈的な内容をこちらから触れてみる方法ですすめた。

4月上旬ごろTの語るところでは，S.F小説をかくことについて……現実から逃避するために，S.Fに逃げ込んだ―また，S.F的世界のなかに自分を伝置づけて，その世界に自分をおくようにもっていったことを肯定し，そういう自分を「サンタクロースを小さい子供が信ずるように，現実の世界がいやになれば，奇蹟を信ずるようにねえ」「S.F的世界のなかに自分をおいて，実際に何かが起る，例えば冒険的S.Fのなかには，地球から突然天体に移動して，そこで活躍するというようなことがあるが，あの主人公みたいなものです」という。

このころから次第に，面接内容にかなりの内面的な展開がみられるようになった。

即ち，「自分は，意志が弱いから，勉強が出来なかった。もっと意志がつよければすべて順調にいったはずです」「（高校に入ってからの）成績が思ったようでなかったから，成績がよければ，意志などは気にしない。……」

高一のときの3日間，山をさまよった事件のとき遺書をかいていることについて触れ，「現実の世界にサヨナラをするための遺書だ」という。「死」を考えているわけでなく，何かを求めていたが，記憶はメチャメチャで，川原に倒れていて，声を出して助けを求めているところを発見された。（図5）

（このはなしになって，顔色も普通になりすらすらと答えが出はじめた）「がむしゃらに何かを求めていたことはたしかであるが，ねむった記憶，休んだ記憶もない。ただ歩いている記憶はのこっている」という。（のちの面接では，こういうときは，気分的には＜うつ状態＞という。）

その後の面接時には，幼少時小学校1，2年ごろからひとりでいるときには，自分を空想的世界におくことが習慣化し，王様とか，クインとかに自分がなりかわって，いろいろなすじがきのなかで，満足感に浸っていた。この傾向はその後，だんだんつよまるようになり，一時期は四六時中に近く，このような状態といえる程になった。「このごろでも病室でベットの上でひっくりかえっていると，別の世界に自分をおいて空想しています。」

「空想癖は，習慣のようになって，子供のころは紙でオモチャや兵隊をつくって，戦争させていたが，だんだん頭のなかだけでやるようになった。結局，一つのストーリーをつくりあげて，その主人公になりきることです。」

5月下旬

山の行方不明事件についての誘因……

1）高1の1学期の成績についてがっかりした（450人中150番）。

2）中間考査のころ，勉強する気がなくなっていた。

3）日常生活のリズムも中3のころに比べてみだれてしまっていた。中学時代は，「試験が近づくと勉強したくなくなり，前夜に「風とともに去りぬ」を1冊よんだことなどがあったが，成績は，10番以内だった」などを話す。

「山の行方不明の事件のときの遺書は，あとでみせてもらったが，最初自分でも，僕の手紙と思わなかった。書いたときの気持はわからないが，かなり調子がくるっていて，幼稚ぽいかんじ―精神年令10才位という感じがした。」

結局，現実から空想の世界へ脱出する。そして，「白昼夢的世界と現実が区別がなくなっていたのかなあ」（ともらす），そして，現実の世界が出てくると，それを白昼夢の世界に自分を追い込もうとした。その世界で自己の存在を表現しようとした。高1ごろと思うが一度だけ白昼夢の世界に入ることをやめようと努力してみたが結局ダメだったという。（だから，異常ではないのかという質問には，それはそうですと容認する。）

6月中旬

病院にいることはうれしい。夢（空想）のなかで学校へいっている。夢が覚めると，ああ学校へいかなくていいんだなあと感ずる。

同年令のものが大学などを目指して勉強していることについての質問では，「自分は将来など考えていない，働くことも考えたことはない」。この病院にいつまでいても，仕方がないではないかと訊くと，「自分には，今の自分しか仕方がない，生きがいも何もない，自分はグループ活動の出来ない人間だ，自分をつよく意識しすぎるからだ」（自己否定）

「入院してから，空想的世界に入る傾向がつよまっている，学研の文学賞に応募するつもりだ」などがつづき，6月26日には，「退院したいのか，退院したくないのか，自分ではわからない」「ここにいることは，わるいことではない，学校へいって，時間に追われている生活よりはよい」

（この日はじめて事件の内容について，比較的気楽にはなし出す）事件の夜，家から出刃庖丁をもって出たときは，何かほかのことを考えていた。一度白昼夢様の状態になると，現実に戻すとかその世界に入るとかは努力はいらない。

山の行方不明のときも，山のなかをくるくるまわっていたが，よく死ななかったと思うという。（この時期から面会時に母親がよくもってきたS．Fマガジンや小説を禁止する方針を親とTに伝えた）

第3期　自己模索・洞察期

（昭和46年7月――昭和46年10月）

7月上旬

「病棟は温室で，外はあらしだ」などといい，勉強することはあらしだ，ここにいれば，勉強しなくてもよいなどという。大学入試受験資格検定試験のはなしを出す，高2で中退の形になっているので，表面的には，関心をもっているので，家裁を通じて，試験などについて調べてもらったが，毎年8月に試験があり，既に，出願締切後であることがわかり，来年を期したらなどのはなしをする。

7月から秋にかけて，面接時に，自己を卒直に表現するようになる。

例えば，自分の性格については，

1) 消極的，内向的，利己主義的な人間で，感情のうごきがはげしいと思う。
2) しかし，腹が立っても，表面には出さない。心のなかは，むかむかしてくる。
3) 意志が弱い，気が弱い人間だ。
4) こういう自分の性格は，わるいと思っているがどうしようもない。

と述べている。

また，事件については，

自分のこのような性格との関係は，全くかんじていない。事件は，新聞にのっているニュースみたいなかんじで，自分が当事者のかんじはしないという。

更に，自分のいままでの生き方や今後の生きる目標などについては，

1) 中学時代までは，なんでもやる気があれば出来るという考えで一貫していた，自信過剰だったと思う。
2) 高校に入って，成績がガタ――と下がってしまって，最初はやれば出来るという気持をもっていたが，だんだんやる気がなければダメだと思うようになったという。

なお，前回の面接時に非現実的世界に入ることを話しかけたが，「これは，いまだかって誰にも話したことがないことであって，T自身がいつのまにか，筆者にしゃべってしまった。」「重荷がおりたようなかんじとともに，急に退院したくてたまらなくなった。また，外へ出てもやってゆけるような自信が出たかんじだ」ともいう。

「いままでは，精神鑑定のときから，事件のことは知らない一点ばりできてしまった。」

この時期の病棟内の生活は，ある程度作業療法にも参加し，入院，当初からつづいていたプライドの高い，且つ傷つけられやすさを潜めた防衛的な対人態度も次第に周囲の人にとけ込むようになり，病院の諸行事にもかなりすすんで参加するようになった。

このような変化はむしろ，小学校時代から一貫していた周囲に対する孤高的態度のために，対人関係の接触がなめらかに出来にくかったのが漸く出来るようになり，Tにとって，この点プラスに作用したものと考えられる。

なお，夏季の間に患者グループが水泳ぎに行った際，しばらく前より好意的であったある若い特定の看護婦を，大勢のみているまえで水着のままで抱き上げたなどのエピソードもあり，自分を自由に表現することが可能になった。

第4期　自己拡張期

＜昭和46年11月―昭和47年6月＞

自己の異常体験と，事件がそれに関係あることを今まで他者に全く知らせていなかったが，6月～7月にかけて，告白的な形ではじまり，殆んどすべてをはき出してしまって，その後，自己について次第に洞察もふかまり，一方，生活指導の方針として，7月以降，S.Fマガジンや小説をよむことを禁じ，且つなるべく病棟内で他の患者に接する機会を多くもつようにさせてきた。

10月末，病棟内の患者自治会（親和会）の会長に選ばれた。会長に選ばれたこは，Tの性格からある程度，やる気になったが，11月末から12月になって，他の患者との関係も必ずしもよくなく，Tはどちらかというと，自分の思うように事を運びたいという傾向があるため，いろいろとトラブルがおき攻撃的感情も出るようになり，又病棟受持医と患者を登場させる風刺的な戯曲を創作し，クリスマスの行事に上演しようとして，病院側を困らせた。Tは転室を希望したので，12月末，準開放病棟へ転室，会長はそのまま退任になった。

このころは，T自身が孤独だった自分を変えようと思い，消極的だったのを積極的にしようとしたりし，自ら，自己を変革し，むしろ自己拡張の姿勢が出てきた時期とみることが出来る。

昭和47年2月ごろまでに，Tは更にいろいろな変化を示している。

生活上の変化としては，

1) 勉強をしなくなった。
2) 小説も全くよまなくなった。
3) 病棟内の数名の友達が出来，よくはなしをするようになった。
4) タバコを喫うようになった。

Tの内面的な変化については，他の患者に従属的態度をとることが出来るようになり，協調性がふえた。

一方では，「自主性がなくなったと自分でも思うが，これでいい」と思うようになっている。

「どうも自分は頭がかたい，入院後も規則をまもらなければならないという気持がつよすぎた。」

昭和47年1月22日には，「昨年11月ごろから，自分の価値観がまちがっていたように思うようになった。そして，自分は，やってゆけるのではないかと自信が出てきて，病院生活にあきたらなくなった」といっている。

その価値観の変化については，（1月29日）「自分のなかにあった大きな荷物から開放されたかんじだ。」重い荷物というのは，社会的地位，或は金銭的な裕福さ，虚栄心のようなものなど……

このような価値感の変化は，動機というほどのものははっきりしないが，親和会の会長になって，病院の不満

を友人への手紙にかいたりし，これなら俺にもやれるぞと思うようになった。早く病院を出る方法を考え，不満をぶちまけることを試みた。しかし，何をやっても退院の手段としては無駄だとわかったのでやめた。

（8月，9月ごろに筆者は今日のようなTの態度の出てくるのを期待して，いろいろ問いかけてきたとはなしたが，Tはそのころは，筆者のいうことが気付かず全くわかっていなかったという。）

この1月のころから，将来の問題として，大学で写真技術を勉強したいことをいい出し，父親，母親が承知したことによって，重荷がおりて，Tの内面的な変化は一段と促進されたと推測される。

Tは，母親達が写真を職業としたいということを承知したことについて，「おどろいたと思う，金ももうからないし，職業的にも地位がひくいから」といっている。

母親が兄と同様に，一流国立大学へ進学させ，自分達以上の生活をさせるという目標をTに押しつけてきた。Tは，それによって方向づけられて，重荷を負わされてきた——この状況に転機がきたとみることが出来る。

2月に入って，

1) 検定試験のために，勉強する。いままでの義務のような形で，勉強させられてきたが，今度は，カメラマンが一番自分に適しているし，このための勉強ならば，気にならずやれると思う。
2) いままで，にせの価値観をもっていた。今度は，生きるよろこびをもてるという価値観だ。
3) にせの価値観とは，既に述べたような金銭，名声，地位，賞讃などであって，自分の育った環境は，こういうものを重視する傾向があって，小学校低学年ごろから，自分のなかに出来あがったと思う。
4) このごろ，自分は積極的に人とはなしをするようになった。人のなかで目立とうとする気がしなくなった。バカバカしいかんじがする。

一方このころに，院内で，病院職員の態度や他の患者とのトラブルなどについて，要求を出して退院する方途を講じ，職員の方で看護の困難さが出てくるようになった。

2月26日，家裁裁判官来院。中間審判を行なう。この病院で，じっくり将来の見透しの出るまでいるように，もし，この病院をいまのまま退院を希望するなら，少年院へ送致することになるとの発言をうけた。

3月下旬より，本人の希望により，院内の職員休憩室で自学自習（数学，英語など）を午前中2時間，週3回開始。当初，約2週間は，一応自習していたようであるが，その後，あまり身を入れる態度はみられず，いろいろの理由（時間がこまぎれだとか）をつけて，結局次第にやらなくなる。

6月4日，裁判官来院，最終審判。

退院，自宅にて試験観察となり，月1～2回　家裁に通所することに決定。

5月下旬，次第に退院が近づくにつれ，不安が出てきたのか，退院後少なくとも1週間の生活のスケジュールをどうしたらいいかなどの質問する。

筆者からは，生活に無理なスケジュールをたてないこと，あせらないように，出来れば，アルバイトのパートの仕事をみつけてやってみることなどをつけ加えた。

以上，当初から長期に亘ることも予想され，事件が背景にあるので，漸進的に，Tの内面をほぐしながら，面接過程をすすめる方法を採った。上記の記載の多くは，T自身のことばを出来るだけ忠実に表出するようにした。Tには，退院を希望するという動機はあっても，現実的世界からの逃避の形で入院していた当初は，大きな変化はなかなか見せなかった。

この経過にもとづいて，4つの時期にわけた。これは，面接及び病院内の行動，生活態度，交友関係の変化などから，一応明確に時期を劃することの出来る変化がみられたように思う。

治療的カウンセリングの方法は，前述の臨床的理論の下に，client-centered method を入れる折衷的カウンセリング（eclectic counseling）の方法を中心にすすめた。

経過の概要

Tのパーソナリティの変化の過程を概観すると，第1期（自己防衛・自己顕示期）の事件以後，精神鑑定留置から当院へ入院する約4ケ月間は，高校に入学後，成績の急激な低下（勉強ぎらいでTには止むを得なかった事態である）があって，このことと，幼少時からの他の級友を蔑視するような態度と，成績抜群でエリート的，自己顕示性を満足さすられてきた孤立的な社会的地位，名声，お金などの環境によってつくられた彼のいう（にせ）の価値観をもっていることの自己不一致の状況にあり，社会性の形成が未熟であり，孤立的であり，傷づけられやすい自我は，現実的世界で背のびをしながら，一方，四六時中といってよいくらい，空想的世界に沈溺する人格傾向をつくり上げたそのままを，病室内でもちつづけた。そして，“銀色の丘（シルバー・ヒル）”„土曜日”などのS.F的世界と現実を混同したような小説家気どりのなかに“みせかけの自己”を表面に出しながら，元来，臆病であり，人に話しかけることが下手な自己を防衛的かたくな，保持しつづけた時期である。

入院がTにとって処罰からの逃避と，高校の勉強生活からの逃避の両者を満足させ，一時的にせよ安定させていたことも加わって力となっている。

第2期（自己告白期）は，小説家気どりで，病棟内で，自分が他の患者とちがうんだという自己顕示的態度を保持しても，病院内での医師はじめ，多くの人からはそのまま容認され，評価されるわけではないことが自覚し出した時期である。

次第にSF小説を書くこともやめてしまい，一時期は，むしろ病棟内の現実的社会に自己を位置づけることが困難となって，日中，他の患者との交流をさけ，ベットに横たわって窓から戸外をみているような姿勢で，白昼夢的世界に浸っていたことは，当時の担当看護婦による観察記録と，のちになってのTの叙述からも明らかである。

このような時期が，第1期の後半（昭和46年2月頃）から，第2期の前半までつづいたわけであるが，一方，筆者は週1回，或は，10日に1回の面接でTの内的世界が既に次第に明確に構造化され，その心理機制も把握出来つつあったので，面接を現実の生活と事件までのTの生活史によって形成された自己との葛藤をおこさせるような状況を設定しながら，受容的態度によって，Tの理解者である態度を一貫して示しつづけることを心掛けた。

結果からみると，このことがTにとって，かたくなな自らをゆさぶる方向へすすませ，昭和46年5月から6月にかけて，次第に自己の内面をのぞかせながら，白昼夢体験をもってきた自己の過去の生活と，事件の関係を予想させるような内容を告白する態度に変化する方向を与えたと考えられる。

第3期（自己模索・洞察期）に入ると可成り卒直に自己の性格的な欠点を自らのことばで表現することが出来るようになった。そして，7月下旬から8月にかけて事件の背景となっていた自己催眠状態における人格の変換現象ともいうべき体験を一気に表出しながら，現実的自己をみつめる機会を深めていったといえる。
病棟の現実生活では，S.F小説や雑誌をよむことを禁止され，他の患者との間にも漸次自己を開き交流をもつようになっている。

第4期（自己拡張期）は昭和46年の11月ごろからであり，自己の洞察が深まり，自からも，病棟内の白昼夢にふける態度を感じながら，病棟内の人間関係のなかに飛び込んでいった時期である。

親の態度においても，一流国立大学に入学して，という親のがんこな期待感を挫折させられたにしても，親の方からのTへの理解が客観的になるにつれ，単なる甘さのみで，共感性の乏しい真の愛情のかけたふれあいや，理解が足りなかった状態から親の側にも変化がすすみ，Tが自らいい出した写真を職業として行きたいという希望を受け入れた。

このように，Tの自己洞察がすすむにつれ，新しい自己拡張が展開されていった。

地位，名声，金銭という重荷から解放され，経済的にも，社会的地位にも，必ずしも恵まれることの少いカメラマンを目指すというTの希望は，自己を現実的世界のなかで，本当に，なんの虚気もなく，自己をそのまま実現しうる方向を見出すことが出来たとみることが出来る。この時期における病棟内の人間関係へのとけこみ，積極的な接触は，Tのことばによれば，病院内ではじめていろいろな人間に接触し，対人関係の下手な自分にとって大きな収穫であったといっている。

以上，1年7ケ月の長期ではあったが，自己催眠状態という異常ななかで，殺人未遂事件を惹起したTは，幼少時からの白昼夢癖から脱し，現実的な世界に，自己を真にみつめうる状態に変容することが出来たことは，われわれにとっても人間の理解に大きな示唆を与えてくれたとみることが出来る。

なお，Tの内面的変容過程は，TATによってもある程度，客観的に把握することが出来たので，次にかかげることにする。

なお，Tの治療については，面接による方法以外，一時，かるい薬物を投与したが，中途で止めた。爾後ビタミン剤などのみ投与し，実質的には，薬物効果は全く意味をもっていないことを附記する。

2. TATにあらわれたTの内面的変化の過程について

事件直後，鑑定留置で入院した病室において，事件1ケ月以内に施行した以後，われわれの治療的面接及び指導終了までの間，Tの内面に変化がみられた以後の時期等，合計4回のTAT（名大版）の検査を実施した。そこにあらわれた反応の変化は，興味ある所見を示しているので概説する。

第1回……	事件後，1ケ月以内 鑑定留置病院	昭和45年9月 （検査者　M）
第2回……	再入院後，Tの内面が変化し出す直前の時期	昭和46年5月 （検査者　J）
第3回……	自己催眠現象について告白した爾後，停滞期ともいえる時期	昭和47年2月 （検査者　J）

各回を通じて全体を共通してみられる特徴

1) 物語の構成に，思考障害や論理的矛盾はなく，よく構成されている。

2) 小説，物語風の傾向がつよくあらわれていて，一部は彼の得意のS．F小説のすじがきをおりまぜたような内容で投影量が普通より可成り多い。想像力の豊かさを示している。

3) カードによる反応時間の差異は，すじがきを見出す時間とも考えられる。

4) テストの前半と，後半，或はカードによって内容のペースががらりと変っている傾向がみられる。

これは，通常ではあまりみられないもので，Tのテスト場面における「構え」の変化を明らかにあらわしているし，これは後述の考察のところで述べるTのパーソナリティにおける二面性を見事にあらわしているといえよう。

第1回の概要

事件直後の精神鑑定資料のなかの成績の概要では，

1) テーマの着想自体が奇異で「ロシアの農村」「パリの裏町での銀行ギャング」「日露戦争」「ボイラーの爆発」「幽霊」などが出てくる。これは，非現実的，空想的思考内容であり，日常生活において占める空想的思考体験が可成り重みをもっている。

2) 10個のテーマのうち「殺人」3，「死」2，「家出」2であり，破壊的，攻撃的反社会的傾向欲求が潜在していることが顕著である。

3) 人間関係ことに両親に対しては，否定的，拒否的感情関係をあらわしている。

ことに父親への感情に否定的な内容が表現されている。

TATでは，物語の場面が非現実的であればある程，そこに表出された欲求は，潜在的なものとみることが出来るとされているので，これもTにとって家族内の潜在欲求をあらわしているものである。

第2回の概要

これは，Tが自己催眠現象による事件惹起にいたった過程などを告白的に表出する約1ケ月まえの時のものである。

1) テスト時に，途中で「疲れた」といい2枚の内容は，比較的簡単な物語でおわる。

2) 物語の内容は，第1回と同様，正常者では殆んどみられないような，小説風なすじがきで，小説をよむように感情のうごきをあらわさずに叙述がつづけられている。

3) 物語の構成は非常によく，内容的に変化にとみ，想像力が極めて豊かであることを示している。

4) テーマの非現実性については，「マフィアの犯罪」「輸送船で多くの人が死ぬはなし」「反戦運動」「自動車事故」などで，正常者には殆んどみられない反応で，この点は，第1回との共通性がみられる。

5) 全般的特徴としては，テストに意欲的に乗った物語は，非現実的，空想的世界であり，2枚の気乗りのしなかったカードは，平凡な内容も一般的な感情のもられていない物語である。

6) 欲求体系としては，自己顕示的欲求がきわだってつよく出ており，又達成欲求もかなりつよく，承認欲求も出ている。ことに空想的内容のテーマでは英雄的存在としてのT自身の主人公が描かれている。

第3回の概要

Tがすべての自己の自己催眠現象や，事件前後の自己の行動や体験を告白的に表現し，病院内生活はやや倦怠的時期にあたり且つ，病院内生活の人間関係に多くのよき体験があることをみとめつつある時期のものである。

1) 10枚のカードについて，あまりテストを実施する意欲がみられず，拒否的であったが，すすめられて実施した。

2) 殆んどの図板において，前回とことなって平凡な，単純なテーマになっている。そして，人間関係も現実的で，むしろ第1回，第2回のような非現実的，空想的世界から脱却したことをうかがわせるものである。

なかの1～2枚は，4分40秒もかかっても，叙述が出来ず「イメージが貧困で困まってしまう」とT自身がテスト中にもらしている。

3) 従って人間関係は平凡で，特に，対人的な感情的な緊張はなくなっているとみることが出来る。

4) 達成動機，と自己顕示欲求は，殆んど表出されなくなり，低下している様相にあることがうかがわれる。

5) 全般的には，現実肯定的な内容になり，平凡化したものであるが，このことは，テスト時における態度からみて，想像力の豊かであったTが，その思考様式，思考活動が変化してしまっている現状を推測させるものである。

以上，3回に亘って実施した，一定期間を経てのTATの検査結果からは，それぞれの時期におけるTの内面的変化を的確に表出しているものとみとめることが出来，治療経過と対比すると，Tの人格の内面的変化をある程度把握しうると思われる。

Ⅶ 考　　察

以上，事件の概要と，家族関係のなかでのTの生活史及び，治療経過についてまとめた。それぞれの項で若干の見解をふれたが，ここで本症例についての全体のまとめについて，その問題点に若干の考察を加える。われわれが，臨床において，接する事例のなかでは，幼児から大人まで，数多く接する機会があるが，情緒的な発達に障害をもつものは，たん念な理解をすすめることによって，その多くは，心理機制，人格の形成過程のひずみをある程度心理学的に了解可能性をもつものである。

本症例Tもその一例ではあるが，幼少時より，空想癖を形成し次第に，白昼夢（Day Dream）体験が習慣化し，ついに，自己催眠状態（Self-hypnotic state）を経験し，2度に亘って，（昭和44年の行方不明事件，本殺人未遂事件）可成り異常な行動を発生した例としては，極めて稀有な一例とみることが出来る。そこで，いくつかの点について考察する。

1. Tのパーソナリティの発達との関連性について

さきにTの治療の仮説的方針をたてるために，Tのパーソナリティの発達について若干見解をまとめたが，治療経過とあわせて考察することにする。

Tの空想癖の形成要因に父兄の気質的素因の影響を考えたわけであるが筆者の方から，今回の事件のTの心理的背景を分析し，説明した際，その心理的の特徴が自己にあまりに類似していることに驚愕の態度を示した。父親自身は，会社員として，経済的にも恵まれ，職業的にも順調な生活を送っている。特に偏位傾向を指摘する性格ではないが，孤独的，自己中心的，空想的傾向は，そのままTの気質的な背景にも影響を与えたとみることが出来る。

そして，Tは，出生後間もなく，泣くことが少なく，ひとり遊びのすきな手のかからない子であって，母親も抱くことをさけるような育児条件のなかで成長した。幼稚園に入るころは，約半年間母親と同伴でなければ通園出来ない程の社会性の発達の未熟さを身につけていた。

しかし，知能は可成り高いので，小学校入学後は，勉強はしなくても抜群の成績を保持出来たので，クラスではリーダー的役割をもつことが出来たが，孤高的であり，友人との協調性は乏しく，学内の規律をまもることについては，他児にきびしい態度で接するように，他児に超越した態度を示していた。

一方，兄の影響をうけ，元来，ひとり遊びの好きな傾向は，書物に興味がむけられて，手あたり次第に読書にたん溺するような特徴を身につけていった。中学校時代では，空想癖が白昼夢となって，S．F小説の影響をうけ，その空想内容も次第に非現実的な傾向をつよめるにいたっている。

このように，Tが白昼夢傾向をみにつけてゆく過程においても，父親母親は，殆んどその特徴に気づいていない。

むしろ，兄と同様に，両親，ことに母親の一貫した一流国立大学へという願望は，子供への期待として強まってはいたが，中学校までは，学業成績が秀れているために，Tに対しては，無言の圧力となったり，地位，名声，金銭という価値感を形成する有力な原動力になっていても，現実的世界では，破綻をきたすまでにいたらなかった。

小学校から，中学校まで表面的には，学校での学業成績の優秀や，生徒会長，級長などの立場にあったので，内面的な非現実世界への逃避的な習癖も目立つこともなくすごせたとみることが出来る。一方，両親，ことに母親が，対人関係において共感性が欠如し，表面的な対人接触しかもちにくい家庭においてこそ，この状態がたもてていたのではあるまいか。

高校進学によって，地域の進学優秀校であったため，1年1学期の中間考査の結果はTの内面に大きな衝撃を与えている。1学期末の成績は，中の上程度であったことは，決定的な破局をもたらす大きな契機になっている。

この夏休み，兄が大学から帰省し，数学の学習の援助をしてもらったりしたが8月下旬○○山中へ行方不明事件をおこしている。

ところが翌年の今回事件も，8月下旬であって，夏休み中の出来事であり，殆んど同様な時期に発生しているが，これは偶然とはみとめがたい。夏休み後半で新学期が近づいた学校生活への嫌悪と不安の増大した時期である。

自己の「みせかけ」のプライド，親との人間関係における安定感は，破局的段階におちいった時期に本事件が発生したとみることが出来る。

その意味で，本症例は，この2つの事件を通じてみると，事件の背景に人格の未成熟な，社会的な適応性の乏しい人間が，現実的世界において，自己認知と，自己の安定感をもち得ないおいつめられた破局状況が認められ，事件は，Tの人格の異常反応現象とみることが出来ると考える。

2. 2つの事件と自己催眠現象について

昭和44年8月の3日間の行方不明事件と昭和45年8月

の殺人未遂事件は，同一の心理機制によるものか否かについて考察する。

この両者が，自己催眠現象によって，非現実的世界のなかで発生した行動であることは共通しているとみることが出来よう。

しかし，前者は，現実世界から幻想世界，あえていえば，非人間界，仮空の世界への脱出であることは，遺書にみられる通りである。

後者は，現実世界における他者への攻撃的刺傷事件である。

何故，このような行動に差があらわれたか。面接を通じてTから得た内的体験に若干の推論を加える。

自己催眠現象に入るようになったのは既に，中学2年時，偶然の機会に体験している。従って，白昼夢状態から人格の極端な変換が行なわれる自己催眠状態へ発展したのは，急激なものでなく，自己訓練によって，漸次，その能力を身につけていったとみられる。

しかし，両者には，人格の発達的変化とともに，Tの現実の自己理解の発達の差異があると考える。

これを，模型的に図式してみると，図8と図9のようである。

両者の間に，1年間の差異があるが，T自身が述べて

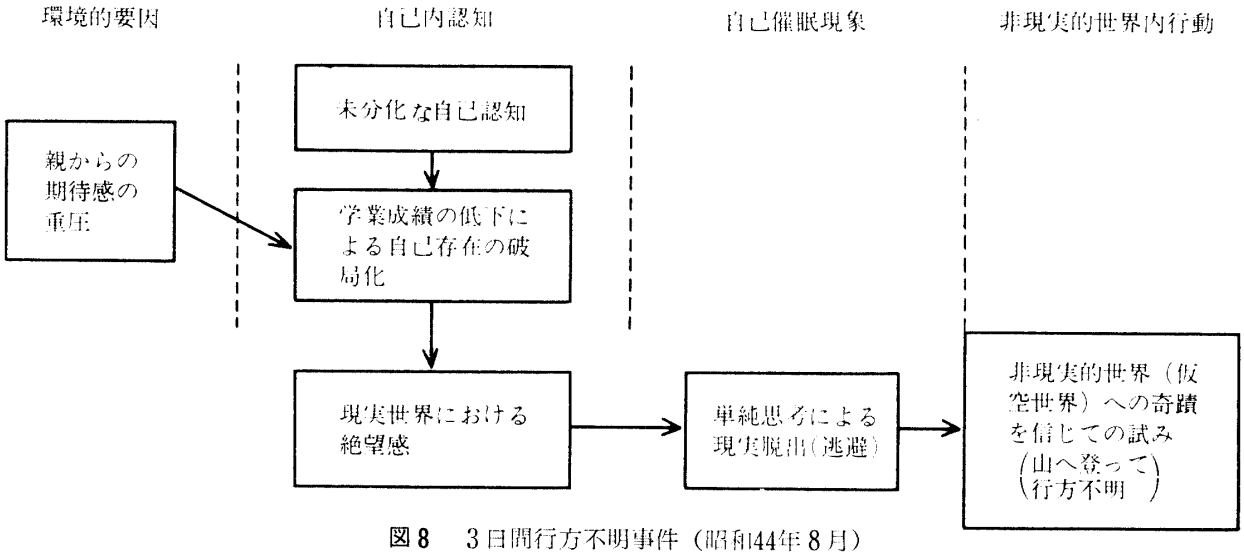

図8　3日間行方不明事件（昭和44年8月）

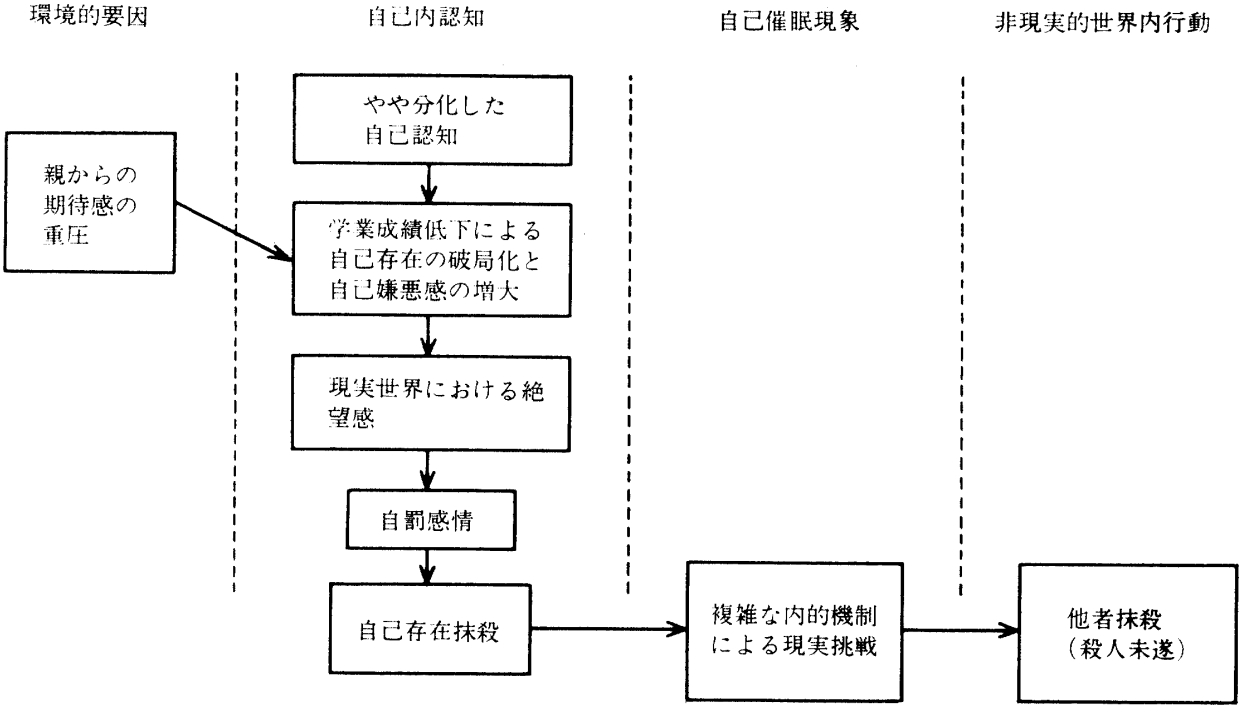

図9　殺人未遂事件（昭和45年8月）

いるように，前者の行方不明事件では，あとから考えてみても，遺書の内容や，行動の背景の発想は，S・F小説の影響をうけたにしても，自分でも精神年令10才位だというように，単純な現実世界からの逃避，脱出の試みであって，その行動の内容は，極めて幼稚であるとしかみられない。

しかし，後者の殺人未遂事件は，同じ自己催眠現象の行動であっても，また，環境的な要因としての圧力は，変化しているとはみられないが，T自身の内的な変化が，行動の差を裏づけている最大のものであるとみる。即ち，現実からの逃避というカテゴリーの機制では，必ずしも差異はないといえるかも知れないが，殺人未遂事件では，T自身のことばから考えても，自己存在の抹殺的観念が増大し，それが非現実的世界において，他者抹殺（攻撃的表現）に裏返しされたのではないかということである。

なお，何故，警察官を襲ったかということについては，本事件の一つの大きな意味をもつものであり，数度に亘って，この点についてTの考えを理解しようとしたが，自己催眠状態の行動であることでもあり，Tは無意識的には，当時の学生運動の動き（派出所襲撃事件がしばらくまえに名古屋市内で発生していた）に関係があるかも知れないと述べている程度で，実際には，この辺のことについては，多くを理解することは困難であった。

いづれにしても，人格的な発達では可成りの変化があり，現実における自己理解が発達した過程をうたがうことが出来る。

以上まとめると，本症例は，幼少時からの人格の発達過程において可成り特徴的な傾向が形成され，本人自身が認知する環境的重圧によって，一種の異常な人格反応をおこし，自己催眠状態において特殊な事件を発生するにいたったものであると考える。

なお，その後の治療的関係によって，Tの自己認知が次第に変化し，白昼夢体験の習癖や，自己催眠現象から脱却し得て，現実認知が増大し，自己洞察，自己拡大など，より精神的健康な状態に成長し得たとみとめられた。本例をまとめたねらいもここにある。

Ⅷ 要　約

1. 17才のT少年が自己催眠現象を身につけ，その現象中に，殺人未遂事件を惹起した一症例について，人格発達過程と治療による自己変容の経過を述べ若干の考察を加えた。
2. 1年7ケ月に亘る長期の治療関係であったが，T少年がほぼ精神健康な状態に改善し，社会復帰が順調に出来たとみとめる。
3. 本例T君は，現在，某大学に在学し，健全な学生生活を送っている。

（なお，本症例について心理検査の実施に協力していただいた神野秀雄氏，佐藤勝利氏に謝意を附記する。）

A CASE STUDY OF A WOULD-BE MURDER IN THE SELF-HYPNOTIC STATE

Fumio MARUI

This case is a boy, seventeen years old, who has been habitually hypnotized by the method of auto-suggestion for about four years. He knifed a policeman in the self-hypnotic state.

This case report was conceived referring to his personality davelopment and a phenomena of self-hypnotism.